

情報科学研究科

【2025年度 大学評価総評】

情報科学研究科は、従来のような高度な専門性の獲得だけでなく、副指導教員の導入による院生の広い視野への導き、履修証明プログラムによる大学院受験への促進、学部学生に対しての大学院進学を推奨する取り組みとそれによる受験生の増加など、数々の改革を実施し成果をあげていて、教育・研究の多方面で改善を続けており評価できる。とくに、多様なバックグラウンドを持つ学生が受験しやすい体制を確立したことが大学院進学者数の増加につながった点、科学技術フォーラムを活用して院生の研究発表の機会や回数を増やし、教育効果を高めた点は高く評価できる。また、2025年度の年度目標も整合性がある内容となっており、教育・研究の充実に寄与するものとして期待できる。なかでも、履修証明プログラムについては、進学の動機付けや入学後の単位認定などのメリットに対し、受講時間や受講料などのデメリットも存在し、学内ならまだしも、学外に向けての広報はかなり難しいと思われ、いったんそこから離れて研究成果などを社会に広く公開することを目標とした点は妥当性がある。

【2025年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024年度大学評価結果総評】(参考)

情報科学研究科では、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育課程・教育内容が提供されている。本研究科では、幅広い専門性を身に付けさせることを目的として、副指導教員制度を運用している。2023年度は、この制度を強化し、各学期毎に学生が副指導教員と面談するのに加え、ポスター形式による中間発表や修士論文審査での事前内容チェック等、副指導教員が指導できる機会を十分に設け、複数教員による研究指導体制の組織化を進めたことは高く評価できる。複数教員による指導はハラスメントの防止にもつながることが期待される。

2023年度は発展的基礎科目として、新規科目(応用解析入門)を開講した。他分野からの学生が入りやすくなるようにこのような科目を設置したことは高く評価できる。また、社会貢献の一つでもある履修証明プログラムを実施したことも高く評価できる。

他大学、他学部からの推薦入試の導入、IISTの活動を通じた留学生の確保など、履修背景の異なる優秀な学生、留学生の受け入れにも積極的に取り組み、学部内推薦と一般入試で収容定員充足率を100%強実現していることは高く評価できる。コロナ禍の収束により、国際会議での発表数が増加したことは評価できるが、円安や世界的な物価高の影響で、大学院生にとって重要な教育機会かつ成果である国際会議での発表が予算的に難しくなる課題が発生した。2024年度の重点目標に、大学院教育に見合う予算獲得のための提言の作成が掲げられており、効果的な提言がされることを期待する。

【2024年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

複数教員による指導については主指導教員とは異なる視点による学生からのヒアリングが副指導教員により行われており、引き続き定期的な指導を徹底したい。

大学院教育に見合う予算獲得については引き続き課題となっており、経常的な予算の不足の実態について現状調査を進めている。引き続き予算獲得のための現場調査と必要経費の明確化に取り組んでいきたい。

(2) 改善・向上の取り組み(教育課程およびその内容、教育方法)

新しく策定したアセスメント・ポリシーに基づき、今後、ディプロマ・ポリシーに示した学習成果をどのように把握しますか。また、その結果を研究科としてどのように活用しますか。

＜対応する大学基準：学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。＞

＜今後の計画＞

別に定めたアセスメントシートに基づき、単位修得数、学位論文の内容、論文審査会の実施状況、学位記授与者数、学会発表実績、修了生アンケート、休学率・退学率、進路先状況、博士後期課程では

予備審査および本審査の提出状況・審査内容・審査結果、学位論文の公開状況、その他自己点検・評価シートおよび中期目標・年度目標達成状況報告書に基づき把握する。
 検証結果を踏まえた教育の改善・向上の内容は、積極的に自己点検・評価書類にて公表する。

教育課程およびその内容、教育方法について、研究科として過去4年間（2021年度～2024年度）の中で特に改善・向上に向けて取り組んだ事例について、①～⑩の項目から「改善した項目」を選択し（レ点チェック）、その詳細について「改善内容」「改善した結果良かった点・課題」を記入してください。

＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞

事例	
「改善した項目」 （複数選択可）	<input type="checkbox"/> ①開講時期、開講頻度、授業時間等 <input type="checkbox"/> ②授業科目の内容（目標、内容、開設授業科目数、授業科目の統廃合） <input type="checkbox"/> ③授業科目の関係（各科目間の関係、ナンバリング、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修系統図等） <input checked="" type="checkbox"/> ④教育方法（授業の形態、授業方法等） <input type="checkbox"/> ⑤評価基準、評価方法 <input type="checkbox"/> ⑥学生の履修（配当年次等） <input checked="" type="checkbox"/> ⑦地域社会・国際社会・産業界等の社会との接続 <input type="checkbox"/> ⑧学習支援（単位の実質化のための取り組み、各種相談・サポート、学生の主体的な学習を促す取り組み） <input type="checkbox"/> ⑨留学、フィールドワーク等プログラムの充実 <input type="checkbox"/> ⑩その他
「改善内容」 ・ 博士後期課程の社会人学生の早期修了の枠組みを2021年度から開始した。 ・ 2022年度は履修証明プログラムを立ち上げた。 ・ 他の研究科の教員や大学院生、および、企業の方々への研究紹介や議論を通じて俯瞰的な視野の獲得とコミュニケーション能力の獲得を目指すため2024年度から中間発表を科学技術フォーラム内で実施することとした。 ・ 以上は過去4年間の中期目標・年度目標達成状況報告書に記載されている多数の改善の一部である。	
「改善した結果良かった点・課題」 ・ 2021年度に博士後期課程の社会人学生1名の早期修了を承認した。 ・ 履修証明プログラムの入学者1名は本科への進学に繋がったが、希望実績は1名に止まっている。 ・ 科学技術フォーラム内で40名程度の発表を継続し、副指導教員からの意見も含め、各自の研究を様々な方向から見直す機会ともなっている。	

（3）改善・向上の取り組み（教員・教員組織）

教員・教員組織について、研究科として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを「項目」の中から選択し、「内容」を記入してください。

・教員組織に対する取り組み※
 ※主に、教員が担う責任の内容、科目適合性の学内での判断、各教員の担当授業科目、担当授業時間の把握・管理（複数の所属、他大学・企業等との兼務教員について業務状況や教育効果含む）について

・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につながる組織的な取り組みとその成果

・授業における指導補助者（TA等）の活用に対する取り組み

＜対応する大学基準：教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。＞

＜対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。＞

＜対応する大学基準：教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞

「特色または課題」	特色
「項目」	教員組織に対する取り組み※主に、教員が担う責任の内容、科目適合性の学内での判断、各教員の担当授業科目、担当授業時間の把握・管理（複数の所属、他大学・企業等との兼務教員について業務状況や教育効果含む）について
「内容」 採用する教員の分野や職位等について学部と合同で教授会懇談会を開催し議論している。	

II. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

(1) 自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

<p>研究科における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p> <p>＜対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A (概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。</p> <p>Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p> <p>Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

(2) オンライン教育の取り組み

<p>オンライン授業は「2024 年度以降の授業編成における留意点について（報告）」(2023 年度第 4 回研究科長会議資料 No.2) に沿って、適した授業科目に用いられ、その有効性や教育効果を確認し、改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A (概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。</p> <p>Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p> <p>Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

(3) 学生の声を活かした取り組み

<p>研究科レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A (概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。</p> <p>Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p> <p>Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		
<p>授業レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A (概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。</p> <p>Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p> <p>Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

(4) 定員管理の適正化

<p>研究科の在籍学生数を適正に維持する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取り組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>S (さらに改善した又は新たに取り組んだ)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。</p> <p>Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p> <p>Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。</p>		
<p>《内容》</p>		

限られた研究科予算額や学生研究室のスペースの中で教育・研究水準を維持するため、2024年度2月実施入試では志願者に指導教員を第2希望まで記述させることで受験生の偏りの防止を試みるとともに、2025年度は教員1名1学年あたりの修士課程の受け入れ人数の目安を執行部および教授会で議論し定めた。また、博士課程進学希望者は増加しており、今年度は修士2年生のうち2名からの学内推薦入学試験受験許可申請があった。

Ⅲ. 2024年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
中期目標	情報処理学会あるいは ACM が定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的かつ社会的ニーズの高い教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、学び直しを含め、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。	
年度目標	大学院設置科目のカリキュラムツリーを明確にする。学部教育における各コースの上位に接続するカリキュラムとして大学院科目のカリキュラムツリーを作成し、各科目が学部科目どのような繋がりがあるかを明確にする。これにより、不足する専門知識や科目を明確にする。	
達成指標	カリキュラムツリーの作成。新規科目の検討状況	
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	学部教育の上位に接続するカリキュラムとした大学院科目のカリキュラムツリーを作成した。今後の発展が期待される量子コンピュータについて学ぶ科目として2025年度から「量子コンピュータ特論」を設置することを決定した。
	改善策	引き続き不足する専門知識や科目を明確にする。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	学部教育の上位に接続する形でカリキュラムツリーを作成したことは、研究科設置科目の位置づけを明確にするうえで評価できる。また、今後の発展が期待される分野で新設科目「量子コンピュータ特論」を設置したことも高く評価できる。
改善のための提言	研究科の方向性を考慮しつつ、人事計画とも連動させて up to date な科目設定が期待される。	
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
中期目標	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。	
年度目標	副指導教員による指導が機能しているかをチェックし、実施方法や頻度についてフィードバックを行う。	
達成指標	副指導教員による指導の実施率	
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	ポスター形式による中間発表、修士論文審査での事前内容チェック等、副指導教員が直接指導できる機会を十分に設け、指導機会を増やしている。
	改善策	指導内容や指導機会に関しては、指導教員や副指導教員に依存する部分が大きいため、引き続き指針策定やルール化等を検討する。
	質保証委員会による点検・評価	
所見	副指導教員による指導の機会を増やすことは学生の専門性を広げるうえで重要なことである。ポスター形式による中間発表は研究上の問題解決に別の方向からのヒントを与えることができるため、高く評価できる取り組みである。	

	改善のための提言	修士の学生が気軽に副指導教員と議論できる環境の整備も有効であろう。
	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
	中期目標	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力/コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
	年度目標	科学技術フォーラムでの研究発表を推奨する。同フォーラムにおける他の研究科の教員や大学院生、および、企業の方々への研究紹介や議論を通じて俯瞰的な視野の獲得とコミュニケーション能力の獲得を目指す。
	達成指標	科学技術フォーラムでの発表件数
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	中間発表を科学技術フォーラムで実施することとし、合計40件の研究発表を行った。
	改善策	引き続き、科学技術フォーラムでの発表を推奨していく。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	修士の学生にとって自分の研究を外部に向かって発表し議論することは、各自の研究を様々な方向から見直す機会となる。こうした経験を多くの院生に体験させられたことは高く評価できる。
改善のための提言	継続的に、いろいろな機会を得て院生に研究発表の体験を積ませることを期待する。	
	評価基準	学生の受け入れ
	中期目標	一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、多様なバックグラウンドを持つ学生が受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。IISTの活動を通じた留学生の確保に努める。社会人博士の受け入れを推進する。
	年度目標	2月実施の入学試験において志望する教員を第二志望まで記述させる。これにより1名の教員に志望が集中した場合でも、第二志望の教員を指導教員とすることで幅広い学生の受け入れが可能となる。
	達成指標	大学院の受験者数
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	修士課程の推薦および一般入試の受験者数は68人となり、受験者数は大幅に増加した。2月実施の入学試験では、希望する教員を第二志望まで記述させることとし、幅広い学生の受け入れが可能となった。
	改善策	7月入試で、ほぼ定員が埋まることとなり、2月入試の合格者数を絞ることとなった。今後は2月入試のあり方等を検討する必要がある。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	修士課程の学生数が定員に達したことは、幅広い学生を受け入れる観点から高く評価できる。志願者に第2希望まで記述させる取り組みも受験生の偏りを防ぐ有効な取り組みとして評価できる。
改善のための提言	情報科学研究科にとどまらず、小金井キャンパス全体での大学院生の教育・研究に必要な設備や予算の確保への取り組みが期待される。	
	評価基準	教員・教員組織
	中期目標	学部と連携した教員採用を行い、4つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。
	年度目標	学部と連携し、教育・研究領域を網羅する教員組織を編成するための人事を行う。
	達成指標	教育・研究領域を定めた人事の実施

年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	本年度は新規採用はなかった。
	改善策	引き続き適切な人事、組織運営に努める。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	本年度の新規採用はなかったが、学部と連携して採用に当たっての研究科の将来を見越した採用計画を事前に策定する取り組みを継続していることは評価できる。
	改善のための提言	学部と連携して、幅広い分野に対応できるような人事計画の策定とともに透明性のある人事選考手続きの継続が期待される。
評価基準	学生支援	
中期目標	学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。留学生向けのキャリア支援体制を充実する。留学支援。	
年度目標	昨年度に実施した学部3年生夏学期終了後の成績に基づいた推薦制度を継続し、大学院進学を推奨する。	
達成指標	推薦入学希望者数	
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	修士課程の学内推薦入試規模者数は25人となり、大学院進学者数の増加へとつながった。
	改善策	引き続き推薦制度を継続し、大学院進学を推奨する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	学部学生に対して大学院進学を推奨する取り組みが有効に機能していることは高く評価できる。
	改善のための提言	大学院生の教育・研究環境および予算の充実に向けた取り組みが重要であると考えられる。
評価基準	社会連携・社会貢献	
中期目標	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示を行う。履修証明プログラムの受講者を増やす。	
年度目標	履修証明プログラムの認知度を高め、受講者数の増加を目指す。社会人学生の受講を促進するため、市ヶ谷キャンパスで授業を実施する。	
達成指標	履修証明プログラム（科目等履修生）の志望者数	
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	履修証明プログラム対応のため、オンラインと市ヶ谷で受講可能な科目を設置した。しかしながら、履修証明プログラムの志望者数は0人であった。
	改善策	引き続き、オンライン、および、市ヶ谷で受講可能な科目について検討し、履修証明プログラムの履修者増加を狙う。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	履修証明プログラムの志望者数が0人であったことは残念である。社会の認知度の向上とともに需要調査といった取り組みの必要性を感じる。
	改善のための提言	受講可能な科目数を増やすなどより魅力的な取り組みが期待される。
【重点目標】 大学院教育に見合う大学院予算獲得のための提言の作成を目指す。		
【目標を達成するための施策等】		

他の私立大学大学院の予算の現状の調査、学費とともに徴収している実験実習費の妥当性の調査、および、学部教育とは明確に異なる大学院教育における必要な経費の明確化

【年度目標達成状況総括】

学部3年生夏学期終了後の成績に基づいた推薦制度の効果により、大学院を受験する学生が大幅に増え、学則定員を大きく上回る数の大学院生が入学予定である。大学院受験者数、入学者数の増加という目標は達成できた。また、大学院中間発表を科学技術フォーラムで実施することにより、多くの学生が同フォーラムで発表した。他の研究科の教員や大学院生、および、企業の方々への研究紹介や議論を通じて俯瞰的な視野の獲得とコミュニケーション能力を獲得する機会を与えることができた。社会貢献・社会連携について、履修証明プログラムの受講生が0人であった。引き続き、社会人が受講しやすい科目、受講方法の検討が必要である。

IV. 2025年度中期目標・年度目標

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	情報処理学会あるいはACMが定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的かつ社会的ニーズの高い教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、学び直しを含め、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。
年度目標	前年度に作成したカリキュラムツリーを踏まえ、引き続き不足する専門知識や科目を明確にする。
達成指標	先進的かつ社会的ニーズの高い科目の柔軟な組み込みのための枠組みの整備状況
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。
年度目標	国際会議発表を控えた学生の英語によるプレゼンテーションに対し複数の教員が助言を行う。
達成指標	情報科学オープンセミナーにおける学生の英語によるプレゼンテーションの実施状況
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力/コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
年度目標	引き続き、科学技術フォーラムでの発表を推奨する。
達成指標	科学技術フォーラムでの学生の発表状況
評価基準	学生の受け入れ
中期目標	一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、多様なバックグラウンドを持つ学生が受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。IISTの活動を通じた留学生の確保に努める。社会人博士の受け入れを推進する。
年度目標	研究科募集要項の見直しを含め、一般入試、推薦入試における適正判断を厳格化する。
達成指標	研究科募集要項の改善状況 推薦入試の実施状況
評価基準	教員・教員組織
中期目標	学部と連携した教員採用を行い、4つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。
年度目標	オープンセミナー等における教員の研究交流を活発にする。
達成指標	教員の研究交流実施状況

評価基準	学生支援
中期目標	学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。留学生向けのキャリア支援体制を充実する。留学支援。
年度目標	大学院定員を鑑みた大学院推薦入学基準を再検討する。
達成指標	大学院推薦入学制度の検討状況
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示を行う。履修証明プログラムの受講者を増やす。
年度目標	研究科 Web サイトにおける研究活動成果の公開を促進する。
達成指標	研究科 Web サイトにおける研究活動成果の公開状況
<p>【重点目標】 教員の指導分野と適切に整合した入学希望者を募るためにも、学生や教員の研究成果の研究科 Web サイトでの公開を促進する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 大学の Web サイトで公表されている受賞等の研究成果の情報を研究科の Web からアクセスできるようにするとともに、トップカンファレンス採択など受賞以外の情報や特色のある取り組みなども積極的に研究科の Web サイトで公表する。</p>	

IV-2. 2025年度中期目標・年度目標達成状況報告書

情報科学研究科

評価基準	中期目標 (2022-2025年度)	年度目標	達成指標	年度末報告				
				教授会執行部による点検・評価(教授会承認)		質保証委員会による点検・評価(教授会報告)		
				自己評価	理由	改善策	所見(達成状況の評価とその理由)	改善のための提言
教育課程・学習成果 【教育課程・教育内容に関すること】	情報処理学会あるいはACMが定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的かつ社会的ニーズの高い教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、学び直しを含め、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。	前年度に作成したカリキュラムツールを踏まえ、引き続き不足する専門知識や科目を明確にする。	先進的かつ社会的ニーズの高い科目の柔軟な組み込みのための枠組みの整備状況	A	既設のグローバルCIS特別講義は引き続き学則変更なしに柔軟に講義内容が変更でき、来年出講依頼にあたり、現行科目が引き続き社会的ニーズの高い科目であると確認した。他分野から入学した学生に対応する応用解析入門についても引き続き来年度開講する。	今後も社会的ニーズの変化を考慮した枠組みの整備を検討する。	カリキュラムツールに基づき、不足する専門知識を明確化した上で、社会的ニーズの高い「グローバルCIS特別講義」等を柔軟に運用している点は、高度専門職業人養成の観点から高く評価される。また、他分野出身者への補完教育(応用解析入門等)の継続も、門戸を広げる施策として適切である。	今後も技術革新の速度に合わせ、先端領域の科目を機動的に導入できる体制を維持されたい。また、博士後期課程への進学を促すような、より研究深化に特化した科目構成の検討も期待される。
教育課程・学習成果 【教育方法に関すること】	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。	国際会議発表を控えた学生の英語によるプレゼンテーションに対し複数の教員が助言を行う。	情報科学オープンセミナーにおける学生の英語によるプレゼンテーションの実施状況	S	通常のオープンセミナーで割り当てられている回以外に5回の臨時オープンセミナーを開催し、国際会議の発表と議論を行なった。	臨時オープンセミナーの学生の更なる参加に向けて、より積極的な呼びかけと、学生が参加しやすいスケジュールを検討する。	TA(ティーチング・アシスタント)制度の活用により、きめ細かな学修支援体制が構築されている。また、「研究指導記録」の活用による指導プロセスの可視化と組織的な共有は、学位論文の質保証において重要な役割を果たしていると評価できる。	研究指導のさらなる高度化に向け、学外の研究機関や企業との共同指導、あるいは海外大学とのオンライン共同ゼミなど、研究の質を国際水準に引き上げるための指導手法の多様化を検討すべきである。
教育課程・学習成果 【学習成果に関すること】	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力/コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。	引き続き、科学技術フォーラムでの発表を推奨する。	科学技術フォーラムでの学生の発表状況	S	中間発表をフォーラムで行うことにより多くの発表を行った。	中間発表としての教育効果が薄れるなどのデメリットが明確になったため、中間発表会と科学技術フォーラムを分離しつつ成果発表の機会を確保する方策を検討する。	研究指導記録の徹底により、学生の研究進捗が適切に管理されている。また、学会発表等の対外的な研究成果報告が質・量ともに維持されており、大学院としての学修成果が着実に創出されている点は評価に値する。	研究の質を担保しつつ、課程博士の学位授与率向上に向けた支援をさらに強化すべきである。特に、国際会議での発表や査読付き論文の採択を促進するための、英文校閲支援や公募情報の早期提供が求められる。
学生の受け入れ	一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、多様なバックグラウンドを持つ学生が受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。IISTの活動を通じた留学生の確保に努める。社会人博士の受け入れを推進する。	研究科募集要項の見直しを含め、一般入試、推薦入試における適正判断を厳格化する。	研究科募集要項の改善状況 推薦入試の実施状況	A	学部と協力して修士課程推薦入学基準を引き上げた上で、推薦入学で修士課程に21名を合格させたほか、博士後期課程に2名を合格させた。留学生の日本語能力に関するヒアリングを研究科教授会でを行い、募集要項でJLPTの要求水準を引き上げる改善を行った。	問題作成の負荷の軽減も含めた入試科目の編成を引き続き検討する。	研究室ごとの定員策定と推薦基準の引き上げにより、大学院教育に適した質の高い学生を確保する仕組みが整備された点は、研究科の質維持において適切な判断である。IIST(国際大学院プログラム)における事前マッチングも効果的に機能している。	内部推薦基準の厳格化を継続しつつ、学外および海外からの優秀な学生をより広く獲得するための戦略的な広報活動を強化すべきである。特に社会人学生の受け入れ拡大に向けた入試制度の柔軟化も検討の余地がある。
教員・教員組織	学部と連携した教員採用を行い、4つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。	オープンセミナー等における教員の研究交流を活発にする。	教員の研究交流実施状況	A	オープンセミナー・CISグローバルセミナーで研究科の教員が多くの研究紹介を行い、小金井交流セミナーで研究科教員が研究紹介を行った。	引き続きオープンセミナー等での活発な交流を行う。	デジタルメディア学科を中心とした新規教員人事において、専門分野の整合性と年齢構成のバランスを両立させたことは、研究科の長期的な安定運営に寄与するものであり、高く評価される。	個別の人事にとどまらず、研究科全体の研究力の底上げを図るため、クロスポイントメント制度の活用や、若手教員が大型研究プロジェクトを主導できるような組織的バックアップ体制を構築すべきである。
学生支援	学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。留学生向けのキャリア支援体制を充実する。留学支援。	大学院定員を鑑みた大学院推薦入学基準を再検討する。	大学院推薦入学制度の検討状況	A	研究室ごとの定員を制定し、それに沿った推薦基準の引き上げを行なった。また推薦入学数に沿った第2回入試受け入れやIIST事前マッチングを行なっている。	引き続き学部と連携し、学部学生の習熟度に応じた推薦入学基準を確認する。	留学生への日本語教育やキャリア支援に加え、オープンセミナーを通じた研究交流の活性化など、多様なバックエンドを持つ学生に対する重層的な支援が行われている点は、ダイバーシティ推進の観点からも評価できる。	学位取得後のキャリアパスの多様化(研究職、海外企業、起業など)に対応するため、修了生とのネットワーク構築や、学術研究を継続するための経済的支援(リサーチ・アシスタント制度の拡充等)をさらに進めるべきである。
社会貢献・社会連携	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示を行う。履修証明プログラムの受講者を増やす。	研究科Webサイトにおける研究活動成果の公開を促進する。	研究科Webサイトにおける研究活動成果の公開状況	S	教授会での受賞情報提出の呼びかけ等を通して、多くの受賞情報を掲載するとともに、学会等の事情を考慮し、受賞から時間が経過した成果も大学ページに掲載されるよう働きかけ、実現した。	学会発表に伴う費用が物価や為替の変動により高騰しており、実態に即した支援の可能性を引き続き検討する。	研究科Webサイトを通じて教員・学生の受賞情報を積極的に発信し、可視性を高めたことは、研究成果の社会還元として適切である。また、物価・為替変動に伴う学会発表費用の高騰に対し、支援の可能性を検討している姿勢も評価される。	情報発信をさらに一歩進め、産学連携の窓口としての機能を強化すべきである。企業との共同研究の成果を積極的に公開し、履修証明プログラム等を通じて社会人の学び直しニーズをより戦略的に取り込むことが求められる。

自己評価について

- S 目標を十分達成し、質の向上が顕著である。
- A 目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。
- B 目標の達成が不十分である。
- C 目標が達成できていない。

【重点目標】	【目標を達成するための施策等】
教員の指導分野と適切に整合した入学希望者を募るためにも、学生や教員の研究成果の研究科Webサイトでの公開を促進する。	大学のWebサイトで公表されている受賞等の研究成果の情報を研究科のWebからもアクセスできるようにするとともに、トップカンファレンス採択など受賞以外の情報や特色のある取り組みなども積極的に研究科のWebサイトで公表する。
【年度目標達成状況総括】	
重点目標である成果情報の公開促進や推薦入学基準の引き上げ、定員管理の詳細化を含めて研究科で多くの改善努力が行われた。外部資金の獲得も引き続き良好であり、臨時オープンセミナーを含めた活発な研究交流も行われた。研究科への予算獲得も行われ多くの研究発表が実現したが、修士学生モニタの予算措置の要望や、年度末に近い学会発表の支援などのありかたを引き続き検討していく必要がある。	